

## 「慶北大学校サマースクール参加報告書」

京都大学文学部 2 回生 水無瀬美歩

今回の慶北大学校でのプログラムで得られたのは、韓国の大学生と 12 日間ほとんどの時間を一緒に過ごし、韓国語と日本語で毎日たくさん笑い合ったというかけがえのない経験と、あたたかく、幸せな気持ちです。交流プログラムや、文化研修、語学留学など、海外で一定期間を過ごす機会は珍しくなく、様々なものがありふれている時代です。しかし、それらに共通するであろう、帰国後の達成感や満足感、海外での生活による疲労感といった感情よりも、これほどまでに幸せな思い出が胸に残り、現地の学生からあたたかい贈り物をもたらしてきたかのような、優しい気持ちを抱けるという体験はなかなかできないのではないかと思います。

日本人学生を対象にした、今回のサマースクールは、単なる韓国語授業だけではなく、テグのシティーツアーや夜景ツアー、韓服と韓国の茶道体験、大学のサークルにお邪魔してのテコンドーやサムルノリの体験、3Dプリンティング、そしてウルサンの自動車工場見学や週末のソウル旅行など、毎日様々なプログラムが提供されました。個人旅行ではあまり訪れないであろうテグを、テグで暮らす韓国人学生が案内してくれたり、慶北大学校の実際のサークルの風景をのぞくことができたりしたという体験は、国際都市ソウルで過ごしたり、観光客として韓国を訪れるだけでは決してできなかったことだと思います。それらの全プログラムはもちろんのこと、朝ごはんの配達から韓国語授業の教室サポート、そしてお昼ご飯も夜ご飯も、8名の韓国人学生のバディーさんが全て一緒に行動し、見守ってくださいました。初めて会うたくさんの日本人学生の引率や誘導という役割だけでも大変なはずなのに、忙しいなか、バディーさん方は自分から毎日積極的に私達を誘ってくれ、食事や観光、雑談にカラオケなど、本当に多くの時間を私達のそばで過ごしてくれました。外国語が飛び交う環境で、自ら外国語で話しかけて輪に入ろうとすることは簡単にはできないし、ストレスがたまるはずですが、しかしバディーさんたちは私達が好きなとおりにもふるまっていますが、毎日笑顔で、本当に楽しそうに、そしてうれしそうに私達に話しかけてくれて、すぐにとけこみ、いつしか日本人学生を中心に輝いていました。彼らの笑顔は本当に印象的で、毎日と一緒に過ごす中で、彼らが外国人という意識は全くなり、人とし、尊敬し、心から好きになることができました。

私達京大の学生は、現地で「日本人のおもてなし」という題でプレゼンをさせて頂きました。そこで私は、おもてなしとは日本人特有の、相手の立場に立って相手を思いやる、丁寧な配慮の心なのだと説明しました。しかし、このサマープログラムを終えて、本当に相手を歓迎し、相手のことを思って行動してくれていたのは、韓国人のバディーさんたちだったのだと感じさせられました。私達のつたない韓国語の発表を、いつも笑顔しか見せたことのなかったバディーさんたちが真剣な表情で集中して聞いてくれていたこと、メモをとってくれていたこと、終わってから良かったよと感想を言いにくれたこと。彼らの姿を思い出すたびに、帰国後も感謝の気持ちで胸がいっぱいになります。

日本から訪れた私達を、「おもてなし」の心で一日中お世話してくれ、そして、たくさんの名前を翌日には皆覚えているなど、一時的に接する外国人としてではなく、心や言葉の壁を感じさせずにたくさん話して、本当の友達になってくれた慶北大学校のバディーさんたち。決して単位や就職活動のためではなく、心から日本人学生と親しくなりたいという強い思いで応募し、参加してくれていたのだろうということが明らかでした。これこそが純粋な国際交流の形なのではないかと、彼らを見て、初めて実感することができました。彼らと過ごした時間や、彼らの私達への真摯な思いやたくさんの笑顔を思い出すたびに、帰国後もとてもあたたかい気持ちになります。彼ら韓国人学生と出会えたことが、今回派遣させて頂いた一番の収穫です。彼らとまた直接会うときには、今度こそ日本人の「おもてなし」で歓迎したいと思います。